

平成 30 年 6 月 28 日現在

機関番号：11401

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2014～2017

課題番号：26360038

研究課題名(和文) インドネシア1965年9.30事件の被害者女性たちのナラティブの収集と記述

研究課題名(英文) Narratives analysis and documentation of women victims in Indonesia September 30, 2065 incident

研究代表者

三宅 良美 (MIYAKE, Yoshimi)

秋田大学・国際資源学研究科・教授

研究者番号：70396547

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,000,000円

研究成果の概要(和文)：1965年当時インドネシア共産党PKIのメンバーおよびその傘下にあった人々が犠牲になったインドネシア1965年9.30事件で逮捕された女性生存者を確認、2014年3月より2018年3月まで、毎年3月と8月、ジャカルタ、ジョグジャカルタおよびその近郊に住む約20名の女性とその家族に面会、その悲劇的体験についての語りを録音、録画、書き取りを行い、その言語学的特徴を探った。また、語られる『物語』そのものを書き取り、解釈を行い、犠牲者自身の使うキーワード研究も行った。犠牲者たちがどのように今を生きているのかも記録した。現在著書執筆中。ナラティブ、および文法構造について論文3・学会発表6。

研究成果の概要(英文)：I conducted interviews, video taping and recording of the victims narrative on the Indonesian 1965 Sept.30 incident. I was introduced to those victims by Indonesian Human Right Office (Komnas Ham). Every March and August in the years of 2014-18, I collected the data, in order to do linguistics analysis of their narratives. I visited and recorded 20 victims' narratives.

I also visited University of Leiden, University of Melbourne, University of Cornell as well as University of Pennsylvania for library research. I have presented my analysis of the narratives at ISMIL(International Symposium of Malaysian and Indonesian Linguistics), IPrA(International Pragmatics Association), Japan Indonesian Studies Society in 2017, and two international conferences in 2018 (till May 2018).

研究分野：言語学

キーワード：インドネシア1965年9.30事件 ナラティブ研究 ジェンダー研究 言語プラグマティクス 犠牲者の語り

1. 研究開始当初の背景

インドネシア 1965 年 9.30 事件とは、10 月 1 日未明に、ジャカルタに住む 6 人の陸軍大佐が、それぞれの自宅から、ある集団により連行され、その 5 日後彼らの遺体が郊外の古井戸で発見された。この事件の首謀者が、当時優勢だった PKI (インドネシア共産党) だとされ、PKI 傘下にある組合などのメンバーが逮捕、連行され殺害された。犠牲者は 100 万人に上るとされるが、逮捕、いくつかの刑務所、最後には収容所で生き延びた人もまた社会的差別を受けて沈黙を強いられた。1998 年のレフォルマシ¹改革以降、この犠牲者がようやく集まり、この体験について語り合えるようになった。2000 年代にはいるとこの犠牲者たちの証言の出版がはじまったが、この証言をナラティブとして研究、その言語的側面についての研究はなかった。

2. 研究の目的

インドネシア 1965 年 9.30 事件の被害者女性たちを探し、そのナラティブを収集、記述する。インドネシア現代史の中で最も暗黒の部分とされる 9.30 事件直後の共産党関係者のクレンジングの際に、検挙され、拷問や性的暴力を受け、その後密かに暮らすことを余儀なくされていた女性たちの語りに耳を傾け、記録、収集する。その語りに表れる暴力と隔離の問題を再考する。それぞれの女性のライフヒストリーを追い、拷問と投獄の体験に到る過程、性的暴力の背景を探る。発話、ナラティブ分析、ジェンダー研究、ポストコロニアリズムの視点に解釈、分析をおこなう。さらに、ナラティブを出版することにより、犠牲者たちの声を公に伝えることが必要である。

3. 研究の方法

まずは、犠牲者たちを探す。犠牲者である女性の発話に見られる言語的特徴と、女性の身体に関わる言語、心理、身体への暴力を探る。一緒に労働し、学んできた女性たちが「魔女」にされるプロセスを、彼女たちのナラティブを書きとりし、そこに表れる言語的特徴を分析することにより 1. パラ言語 (音) 的な特徴、2. 文法的特徴 3. ディスコース分析を行う。

データ収集はインタビュー、ナラティブ収集 (録音と録画) である。

2014 年ジャカルタで、犠牲者たちのために創設された高齢者住宅 *Panti Waluyo Sejati*¹ に住まう 5 人の女性たちの話を聞いた。その後 17 年まで毎年 3 月にこの住宅を訪れ、交流を行った。その後、2 階に住まう男性犠牲者たちのうちひとりのナラティブの収集が可能となった。そうして、2014 年から 2018 年 3 月まで、毎年 2 度 それぞれ約 10 日の調査を行っている。

インタビュー対象者、およびナラティブの発

話者は次のとおりである。

1. ジャカルタ *Pantheni Waluyo Sejati* 高齢者住宅¹に住まう 6 人の女性、(階上に 6 人の男性が住まう)

2. Jogjakarta 特別市 (中部ジャワ) に住まう女性 4 人 男性 1 人

3. Borobudur 付近の村落 (中部ジャワ) 男性 3 人 女性 1 人

4. 研究成果

KOMNAS HAM 'インドネシア人権保護局' の協力を得て、ジャカルタに住まう犠牲者女性 6 人、また、Yogyakarta 近辺に住まう女性 6 人と面会、録音、録画を何度か繰り返した。また、女性のみでなく、その家族との交流により幾度かのインタビューやレコーディングを行うことができた。その書き取りと分析に基づき現在まで 6 部の論文を学会で発表しており (うち は 2018 年 7 月発表)、3 つを出版している。これから著書出版に向かって、さらなる論文の作成と編集をする。

当初の目標、すなわち、9.30 事件の女性犠牲者たちのナラティブを収集し、その言語的特徴を探ること、また、『犠牲者が語ること』の意味を探ること、はある程度達成できた。地域としては、かねてから私自身の研究フィールドであった Jogjakarta 特別区とジャカルタの高齢者住宅という限られたところでのデータ収集のみが可能となったが、この地域は実際に犠牲者がかなり多くできている地域でもあるから、彼らのナラティブの特徴を把握することができたと思う。この犠牲者のナラティブの言語学的研究は、言語学、とりわけ語用論のポリティカル・ディスコース分析の分野に寄与している。

この 9.30 事件の間に隠されていた人々のナラティブを聞き、インドネシア国内外に発表、出版することはこの犠牲者たちが望むところである。日本においては、インドネシア 9.30 事件については歴史的研究が熱心になされている。この歴史的問題への言語的アプローチはひとつの新しい分野として、9.30 事件研究に貢献することとなる。

一方、インタビュー、ナラティブ収集にあたり、女性だけに絞ることの難しさを感じた。それは女性は、周囲からのサポートがなければ、孤立して沈黙を守る傾向があるということ、また、日本から来た私が過酷な、とりわけセクシュアリティの犠牲者に話しを聞くことに憤りを感じたからである。今回、当初の予定として、本の出版があったが、これは犠牲者の家族のナラティブも含めて可能となると考える。現在米国の出版社からのオファーはあるがその際には家族と子供の

¹犠牲者のために、Gus Dur 大統領 (故人) が国会議員 Dr. Tjiptoning と開設。ちなみに、Tjiptoning は、中部ジャワ出身で 9.30 事件被害者の娘である。

問題をも含める予定である。

女性被害者のナラティブを聞くことは、その家族 夫や子供達など の話を聞くことでもあった。このナラティブを訊くというプロジェクト自体、外国人である三宅がインドネシアの間に葬られていた人々にインドネシア語でその体験を話してもらうことの意味を問うた。

1998 年のレフォルマシ²以降この事件の真相そのもの、また、犠牲者への聞き取りを収集した書籍も多く出版された (Nadia, Sukanta, Baskara)。これらは、インドネシア人の女性人権活動家、文学者、研究者が、家族のメンバーに聞き取りを依頼したもの、聞いたものを収集したものである。

また、アメリカ出身の Joshua Oppenheimer が、スマトラ北部における殺戮集団のボス、西ジャワの農村において殺戮のリーダーであったことを誇る人物の語りのドキュメンタリーフィルムをそれぞれ製作、公開し、この事件を世界に知らしめた。

9.30 事件について語ってくれる女性たちは多くはない。Panthi Waluyo Sejati 高齢者住宅や、Jogjakarta に住まう人々や、両親を犠牲者にもつ Ms. P により紹介された女性たちを除いて、女性犠牲者に語ってもらうことはほとんど不可能であった。Ms. P もいうが、女性たちは恐怖のあまり、ずっと沈黙を続けていた。男性たちがサポート・グループを作り、語り始めた後も女性たちは口を閉ざしていた (Ms.P)。そのような女性たちのうち、Kiprah という女性団体のサポートを受けて、時にランチやピクニックをとにもすることでお互いに口を開くようになった人たちがいる。自分の子供達のサポートにより語ることができるようになった人もいる (Ms.P)。

同じ人に何度かインタビューを行った。家族同然に付き合ってくれているために何度も会話を録音している。女性の語りは、とりわけ最初は事象を並べることから始まり、その後何度かの訪問により、トラウマのような体験を淡ながらに語るようになる。一方、インドネシアの学生を含め何度も来られること、何度も同じことを聞かれることに [辟易した] と正直に答え、同時にそれまでに語らなかったトラウマを搾り出すように語る女性もいた (Ms.I)。

² 1998 年のアジア経済危機に影響されたインドネシア経済危機、スハルト体制に置いて顕著だった、一族による富の独占や汚職の拡大に大きな批判が生まれ、さらに、東チモールの独立運動に対するインドネシア軍を駆使した非人道的弾圧に対する国際的批判、とりわけ国連の介入から、ついにスハルトは退陣を迫られた。スハルト体制の崩壊とともに、*Reformasi* と呼ばれる改革が進み、とくに民主化が重視され、独裁政権が終焉した。本論ではこれを「レフォルマシ」と呼ぶこととする。

この 20 人のナラティブ分析はまだ完了していない。今日までのナラティブの解釈から次のような特徴を報告することとする。

1. 事件の名称と犠牲者のアイデンティフィケーション

この事件にはいくつかの名称がある。Gestok (Gerakan Satu Oktober) と呼ばれることも多かったが、現在の出版物は、多くが G30S 1965 (Gerakan 30 September 1965) と表記しており、人々がこの事件について話すときも *G Tigapuluh S /gee tiga puluh es/* と呼ぶ。Gestapu (Gerakan September Tigapuluh) と呼ばれたこともあり、ナチの軍警察 Gestapo を想起させ、その意図が見られる。

どの犠牲者たちも、*ex-tapol*, *mantan tapol* (元政治犯) と自己紹介する。*ex* は英語の「元」を意味する接頭辞、*mantan* がインドネシア語の「元」を意味する接頭辞的な修飾語であるが、この二つの間の使い方に違いはないものと思われる。*ex* や *mantan* を使うのは、今日犠牲者たちが解放されているからであるが、このアイデンティフィケーションの仕方には二つの意味がある。

ex-tapol は、多くの場合、身を潜めて生活せざるを得なかっただけでなく、月に一回必ず町内の役所に「正しく生きている」ことを示すために、出頭しなければならなかった。

Tapol というのは、スハルト政権および軍、警察が彼らを、*nara pidana* (刑事事件犯罪者) と区別して呼んだ名称であり、*tahanan politik* (政治犯) が省略されて *tapol* となったものだ。1998 年のレフォルマシ以前は、自己を *ex-tapol* だ、と自己報告の際には述べなければならなかったが、それ以外の人々の前で言うことはなかった。今日「私はもと政治犯です。」と他者の前で名乗る、自主的な自己紹介は、ある意味で、そうした過去を今やっと人前と言えるということの表れでもある。なお、被害者たちの経験は個人個人で大きく異なる。

Tapol と Napi

女性は各地の留置所および最終の収容所 Pelantungan において、犠牲者たちは、刑事犯と一緒に収監されていた。両者の間には多様な接点があった。犠牲者たちは、しばしば、語りにおいて、収容所での生活、活動を *napi* と比較している。*napi* とは窃盗、傷害などで逮捕された人を言い、犠牲者たちは *tapol* である。一方で、この名にはスティグマが常についてまわり、周囲から、白い目で見られ、教職や公務員職に就くこともできなかったときが長く続いていた。

被疑者から犠牲者へ: *Korban* 犠牲者・被害者

korbanという、セム語系の「いけにえ」を意味する名詞は、インドネシア語においては「犠牲者、被害者」を意味する。事件からレフォルマシまでは *korban* は、9.30 事件で殺害された将校らであった。逮捕されたり殺害された人達を *korban* と呼ぶようになったのは、Ita Nadia の *Suara Korban Perempuan Tragedi '65* (Ita Nadia 2007) が出版されてからだと思う。

2. 語ることで語らないこと

犠牲者たちは、ほとんどすべてが身に覚えのないことで突然逮捕されたり、家に軍が侵入し、身柄を拘束されたりしているため、そのときの衝撃が脳裏に刻まれているようである。そのため、語ることに同意してくれた犠牲者は、まずは、逮捕のときの状況を説明してくれる。いくつかの刑務所を転々とさせられ、収容所に行く前に家に帰ることができた人たちは、特にそのときの光景が焼きついているようである。初対面の際、彼らのナラティブには、語ってくれることと、語ってくれないことがある。それを下記に紹介する。

2.1. 語ってくれること

1. いつ、どのように逮捕されたか。

2. 収容所での生活

2.2. 語ろうとしないこと

避けられる内容として、以下の3つが挙げられる。

1. 受けた拷問

2. 離別した家族

3. 政治的視点

2.2.1. 受けた拷問

Ita Nadia (2007), Putu Oka Sukanta (2014) には電気ショックを受けたり爪を抜かれたというくだりがある。インタビューに応じてくれた人々はこうした拷問について自主的に語ろうとはしない。上記の著書にその記述があることを伝えると、「そう、私の歯がこんなに欠けているのはそのせい。」と淡々と語る (Ms.S)。Ms.I は、二度目のインタビューのとき、私の問いを聞いて自分の感情をコントロールすることができなくなり、電気ショックをうけて何度か気を失ったことを語った。男性Lもまた、頭蓋骨が変形していて、それは、斧で強く殴られたせいだという。

2.2.2. 離別した家族

家族との関係においても同様である。女性の場合、夫が逮捕されたために連行され、逮捕されるということが多い。1979年に帰宅することができても、家族自身が *tapol* たちを排斥してきたという苦い体験から、多くは実家に戻ることはない (Ms.S, Ms.I)。家族のことについて語ることはあまりない。

2.2.3. 政治的視点

収容所滞在中、収容所にいれられた *tapol* は、*Santi Aji* (徳の教え) を教え込まれた。

女性たちは逮捕前、それぞれの所属団体において、[女性の労働環境の向上、女性の文盲率ゼロに、]などのスローガンを抱えていたが、そうした、組合の色濃い視点を否定された彼女たちは収容所において、キリスト教、イスラム教に傾倒していった。*Panthi Waluyo Sejati* 高齢者住宅に住まう6人の女性のうち5人は熱心なプロテスタントであり、彼女たちは土曜日になると足繫く教会に通う。ムスリムだという Ms.P は、一日5回の祈りを欠かさない熱心なムスリムである。Yogyakarta で性的虐待をうけた Ms.M、Ms.H、も熱心なプロテスタントになっている。

3. 犠牲者のナラティブの構造

3.1. Sequence

すべての犠牲者 Pelantungan に到るまで刑務所を転々と動かされており、Pelantungan に至らないまま解放された人もいる。もっともどの *tapol* が解放され、どのような *tapol* が Pelantungan まで送り込まれたのかは謎である。13才のときに逮捕された少女は1979年によく Pelantungan 収容所から解放された。一方、CGMI (大学中央委員会) のメンバーの女性は Semarang の刑務所で解放され、トラックで、もと住んでいた Yogyakarta に戻ることができた (Ms.E) この流れを根幹としたナラティブが語られた。

4. 隠語、コードやスラング

犠牲者たちは固有の語彙や表現を共有している。収容所にいる間、また、解放されてからもお互いの運命を共有してきた中で独特の表現や用語を使ってきた。作家の Hersri Setiawan はその著書 *Kamus Gestok* で、200の *tapol* が使用してきた用語を紹介している。これらは、軍、監視者や一般の人々の干渉を避けるために使われてきた表現であるが、同時に犠牲者同士の連帯を深めるために役立っている。犠牲者たちはこうした語彙を創造し、共有し、しばしば笑うこともある。隠語やコードは、ある単語を別の意味で使用するメタファーでなりたっていることが多いが、その単語が外国語起源のものも多い。隠語やコードのうちのいくつかを紹介する。

4.1. Metaphors

1. *cincin* 「指輪」

指の爪や歯などをクリップで留める電気ショック装置。捜査、尋問のときにこの方法が使われた。犠牲者にはこれを思い出すだけで尋常ではいられない人が多い。

2. *anak balung* 「骨の子供」

Ex-*tapol* は、刑を終えて解放されてからも就職の道を阻まれ、家族からも疎外されていたために、仕事もままならず貧困であった。もと政治犯の子供たちは例外なくやせ細っていたために、ex-*tapol* のこどもたちのことを *anak balung* やせ細って骨と皮ばかりの

子 といった。

3. *dibon* 「請求書が来る」(to be billed) 「請求書が来る」は、「捜査・訊問に呼び出される」ことを意味する。夜、「請求書が来た」(*dibon*)人は戻ってくることはなかった。夜呼ばれた者はそのまま殺害されたため *dibon* という受身形の動詞は、犠牲者の人々にとって最も恐ろしいことのひとつであった。彼らは、いつ自分が *dibon* の運命になるのか、つねに恐怖におびえていた (Mr. L.)。

4. *apel* 自己報告 (オランダ語/フランス語)

解放された *tapol* たちは毎月当局に出向いて自分の居場所、活動範囲を報告しなければならず、この義務を *apel* と言った。

4.2. Acronym

犠牲者のコード、語彙にも省略形が数多くある。

5. *kamsing*

kamp pengasingnan 「追放キャンプ」の略である。Buru 島にある犠牲者たちの収容所のことである。

6. Tiga B

Bunuh (殺す) *Buang* (捨てる) *Buih* (泡) のことである。逮捕された人々は、殺され、その死体は遺棄され、多くの場合、川に捨てられたために川に泡のように浮かんできた。*tapol* の運命は、こうして「3つのB」と呼ばれた。

5. 第一人称複数形：第一人称複数形 *Inclusive* の *kita* と *Exclusive* の *kami*

辞書的意味の *inclusive kita* と *exclusive kami* はそれぞれ、会話の相手も含む一人称複数形を *kita*、会話の相手を除く一人称複数形 *kita* である。一方、この犠牲者のナラティブにおける使い方には辞書説明にはない特徴が見られる。

インタビュアーの前で語るとき *kita* を使う、すなわち、インタビュアーもまた話者のカテゴリーの中に入れるのは、「自分たちのつらい体験を聞きに来てくれている」というポジティブな姿勢が表れているものと理解できる。*Kami* に相対する他者はスハルト政権の政治家たちや警察、収容所や捜査室の管理者や、離別した家族であり、Hersri Setiawan もまた、収容所における、*kami* と *kita* の歴然とした違いについて論じている。(Setiawan 2003)。

青い楕円の線で囲まれたカテゴリーは、語り手が *kita* (*inclusive 1st PP*) と呼ぶカテゴリーである。逮捕された経験、収容所を共有した *ex-tapol* とインタビュアーは *inclusive kita* つまり、同じカテゴリーに入れられている。一方、看守や、解放後も疎遠になってしまった家族は *inclusive kita* には入れられない。さらに、刑務所や収容所

は *napi* 刑事犯と生活を共にしており、その *napi* に対し、自分たち *ex-tapol* は *inclusive kita* で語り、*napi* と区別している (Ms.E)。

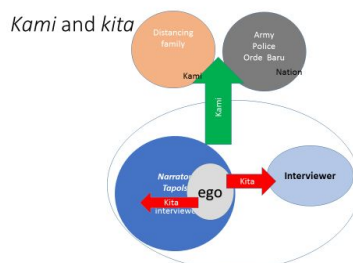


図1. *kami* と *kita*

6. 文法的特徴

犠牲者たちは、あまりにも過酷な体験をしてきたがために、その語りは一見客観的、淡々としていて、彼女たちが感情を抑えているように思われる。しかし、その抑えた感情は、ときどき、ナラティブの文法形態において崩れることがある。この研究はまだ進行状態ではあるが、次の点に注意を向けた。

6.1. 受動態

被害者たちに最初起ったことを、Ms.H, Ms.E は次のような動詞を受動態を用いて語る。

Saya diambil (取られた)

私は dibawa (連れていかれた) ditangkap 身柄を拘束された dijemput 迎えに来られた という表現を使うこともある。

一方、逮捕の際、子供を預けなければならなかったとき、Ms.H は

Anak dititip orang tua bapak.

「子供は夫の両親に預けられた」

と actor が曖昧な形で言っており、話者の無念を表している。

6.2. Code-Mixing

インタビュー対象者は今日までジャワ人であり、ナラティブはインドネシア語で語られたが、独白や、とっさの感情はジャワ語で語られることが多い。

7. 考察

女性は、性的犯罪の対象になっていた。捜査の際、*Gerwani* のシンボルのタトゥーがあるはずだと衣類を剥がされ (Ms.O) 多くの女性はレイプされ (Ms.I) 性的サービス (Ms.M) をさせられた。この過酷な経験から完全に立ち直った女性はいない。しかし、*Reformasi* からさらに 20 年経った今、女性はようやく語れるようになり、政府との *Rekonsiliasi* (Reconciliation) に向けて積極的に動く人も出てきた。一方、犠牲者たちはすでに年老いていて、14 年に会ったひとりのうち、ひとり死亡、2 人は病床にある。日々犠牲者は亡くなっている。

しかし、その子供たちもまたスティグマに悩まされた状況を考え、彼女たちは [人間としての名誉] を再び取り戻して欲しいと政府に訴える。事件の背景は明らかに、すでに

故人となっている元スハルト大統領にある。女性たちは、政府との交渉を望み、[謝罪]の言葉を待つ。

ナラティブの調査者として、私は犠牲者の両親をもつ Yogyakarta 在住の 30 代半ばの女性 Ms.P. に常にお世話になった。彼女のおかげでインタビューやナラティブ収集が可能になった。父親は 20 歳から 35 歳を、ジャワ島の刑務所とブル島の収容所で過ごした。2018 年 8 月、その父親と Ms.P と共に Buru 島を訪れその語りを記録する計画がある。この紙面を借りて Ms.P とその家族に心から感謝の意を述べたいと思う。

References

- Baskara T. Wardaya SJ (ed.),
20087 *Truth will out: Indonesian Accounts of the 1965 mass violence*. Monash University.
Ita F. Nadia
2007 *Suara Perempuan Korban Tragedi '65*. Galang Press
Krisnadi, Bambang Kaswanti Purwa I.G.,
2001 *Tahanan politik Pulau Buru, 1969-1979*. LP3ES
Pohlman, Ann
2015 *Women, sexual violence and the Indonesian killings of 1965-66*. Routledge
Putu Oka Sukanta (ed.)
2014 *Breaking the silence: Survivors speak about 1965-66 violence in Indonesia*. Monash University.
Susanti, (.n.d.) *Kisah Para Perempuan Korban 1965 "Genjer-genjer" Menyeret Sumilah ke Plantungan*
Documentary films:
Oppenheimer, Joshua
2012 *The act of killing*.
2014 *The look of silence*.

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)
〔雑誌論文〕(計 3 件)

三宅 良美

2017 悲劇的経験を語るナラティブの言語学的研究 『インドネシア言語と文化』 24 号:73-86. 査読 有

Miyake, Yoshimi

2015 Pragmatic particles and information structure in colloquial Indonesian Dialogue. *Proceedings of the Second International Workshop on Information Structure of Austronesian Languages, 25 December 2015* (ISBN 978-4-86337-212-2 B212), pp. 103-114. ILCAA, TUFSS Permanent URL: <http://hdl.handle.net/10108/84512>

査読 無

Miyake, Yoshimi

2014 The information structure of Javanese narratives. *Proceedings of the International Workshop on Information*

Structure of Austronesian Languages, 10 April 2014, pp.113-127. ILCAA, TUFSS Permanent URL: <http://hdl.handle.net/10108/75994> 査読 無

〔学会発表〕(計 7 件)

Miyake, Y. and A. Utsumi, 2018a Different Styles and Registers of Bahasa Indonesia spoken by Javanese people ICAL, International Conference of Austronesian Linguistics, Antananarivo, Madagascar. July 17-20, 2018.

Miyake, Y. 2018b Talking about Tragic Experiences of September 30 1965 Incident in Indonesia 14th Israeli Asian Studies Biennale Meeting Beit Maierdorf, Hebrew University of Jerusalem, Mt.Scopes, May 23-24, Jerusalem, Israel

Miyake, Y. 2018c Linguistic features of Javanese-Indonesian narratives of trauma SEALS, Southeast Asian Linguistics Society Meeting. May Kaohsiung, Taiwan

三宅 良美 2017a

悲劇的経験を語るナラティブについての言語学的研究: Identification と一人称 第 24 回 日本インドネシア学会・天理大学、11 月

Miyake, Y. 2017b

A narrative analysis of the voices of Indonesian women victims, IPrA International Pragmatics Association Biannual Meeting, Belfast, North Ireland, July.

Miyake, Y. 2017c

Linguistic features of narratives on tragic experiences in Indonesia. ISMIL Langkawi, Malaysia. May

Miyake, Y. 2014 Women victims of September 30th Incident of Indonesia. 12th Israeli Asian Studies Annual Meeting, University of Haifa

6. 研究組織

(1)研究代表者

三宅 良美 (MIYAKE, Yoshimi)
秋田大学・国際資源学研究所・教授
研究者番号: 70396547